

復旧支援の輪広がる 行政の要望に応え活動を展開



宮城県石巻市・称法寺の遠景。同寺周辺は津波で壊滅的な被害を受けた

の安否を確認して思い 同寺にも法務に必要な物を共有していた。中には布袍・黒衣・輪袈裟 屋内に流入した土砂の撤去や家具の片付けなどを主に行っている。同センターでは仙台別院を拠点に毎日、各自治体のボランティアセンターに活動状況などを確認し、それぞれには、参加人数や可能な活動、車の有無などを確認の上で、条件に該当する行政のボランティア情報を提供して

また、仙台空港近く 3月17日に東北教区にある仙台市宮城野区 現地緊急災害対策本部に設置された「東北教区災害ボランティアセンター」には多くのボランティアが登録して大津波が襲い、辺り一面は水没。濁流に流された家屋や自動車、瓦礫に埋もれ、同寺本堂には大量の瓦礫とともに軽自動車が増え、報告していた。

震災発生後から、自活動後には、全員が同センターに集まってミーティングを行い、活動内容などを報告。活動者相互の情報共有を図っている。

また、活動を希望する人からの問い合わせのために訪れていた諏訪中央病院名誉院長の鎌田實氏が避難所で炊き出しを行うところから、同センターに登録する北海道青年僧侶協議会の5人が協力して行った。



原発から30km圏内のため、十分な支援を受けられていない南相馬市の避難所で、豚汁の炊き出しを行った

全国から義援金や支援物資が寄せられる。同本部は「多くのご支援を有効に使わせていただきたい。必要な物資は日々刻々と変わっている。お送りいただけている時には、今何が必要とされているか、ボランティアセンターに問い合わせていただきたい」と語っている。

本山の緊急災害対策本部の派遣した復旧支援隊をはじめボランティアが、津波で甚大な被害を受けた宮城県石巻市の称法寺（細川雅美住職）を訪れ、復旧に向けた支援を行っている。

称法寺周辺は、津波で家屋が倒壊するなど壊滅的な被害を受け、すべてが瓦礫となっている。同寺の本堂と庫裏は倒壊を免れたが、境内には自動車や倒壊した家屋の瓦礫が2m以上たまり、大量の瓦礫が流入し、壁の一部は崩落し柱数

境内が瓦礫に覆われ、外部と行き来が困難な状況となっている。だが、仙台別院を拠点とするボランティアや支援隊員により少しずつ境内は片付けられ、庫裏に続く通路が何とか確保された。同寺門徒が訪問できるように

は、福島第一原子力発電所から30km圏内にあるため十分に支援が行われていない。また、相馬市立総合病院支援のために訪れていた諏訪中央病院名誉院長の鎌田実氏が避難所で炊き出しを行うところから、同センターに登録する北海道青年僧侶協議会の5人が協力して行った。

鎌田氏のグループがおでんを、本願寺のボランティアグループが豚汁を提供。鎌田氏が「もう一つの薬を持ってきました」とビールを被災者に振る舞い、被災者からは「温かい食べ物と冷たいビールをいただけるなんて想像していなかったの、うれしい」と喜びの声が寄せられた。



称法寺では瓦礫の撤去が進み、庫裏までの通路が確保されたことで、門徒も訪問できるようになった



専能寺では寺院機能の早急な回復を目指し、ボランティアにより本堂に流入した瓦礫などが撤去されている

4月には、京都から看護師の資格を持つ活動者が同センターに登録し活動するほか、多くの僧侶・門信徒から登録の打診が寄せられているという。

また、現地本部には